

辺境領主 成り上がる！ は大貴族に

チート知識でのびのび領地経営します

4

Author

潮ノ海月

Illustrator

すみしま

アクス・フレンハイム

父の突然の戦死により、
領地を継いだ青年。
前世の日本の知識で次々に
功績をあげ、伯爵となった。

エルナ

隣国トルーデント帝国の
侯爵令嬢。お嬢様なのに
お転婆で活動的。

コハル

アクスに拾われた
もふもふ魔獣。
三本の尻尾が
チャームポイント。

スイ

アクスに命を助けられ、
仕えることになった忍。
転移魔法の使い手。

オーラル

魔法王国で賢者と
呼ばれる実力者。
アクスの知識に興味津々。

レイモンド・エクムント

王国南部に領地を持つ辺境伯。
アクス同様、若くして爵位を
継いだ。

CHARACTERS

第1章 聖教国潜入作戦

俺はアクス・フレンハイム。

前世の日本での記憶を持つ転生者だ。

リンバインズ王国の南部、トルーデント帝国との国境沿いの一帯を領地として持つフレンハイム子爵家に生まれたのだが、ある日、突如として帝国が攻めてきたことで父であるバルトハイド・フレンハイム子爵が戦死。それで急遽、俺が子爵を継ぐことになった。

その後、俺の作戦で帝国軍は撤退したのだが、その軍を率いていたウラレント侯爵令嬢のエルナが、なぜか人質として、俺の邸に住むことになった。

それから俺は、ドワーフや錬金術師などを仲間にしたリ、前世の知識を使って色々な発明をしたリ……順調に領地を発展させていく。

そんな中、王国南部のまとめ役であるエクムント辺境伯が亡くなって、俺と同一年のレイモンドが継ぐことになる。

そして彼に協力して、侵攻してきた帝国軍を撃退した俺は、その功績によって伯爵へと陞爵。さらに帝国との国交を正常化させた。

その後は前世の知識を生かして、馬車を改良して、魔石の力で動くようにした魔導車^{まどうしや}を何種類か作り、量産体制を整えた。

しかしここで、エルスハイマ聖教国が口を出してきた。

魔導車の製造方法を聖教国に開示しろと言ってきたのだ。

それを拒否したところ、聖教国側の手先がエクスント辺境伯領に危害を加えようとしてきた。

一方的にやられてばかりでは気に食わない。

そこで俺は仲間と計画を立てることにした。

エルスハイマ聖教国が崇めるのは、人族の神とされている、女神イーリア。そして聖教国はこれを理由に、亜人を迫害している。

そのため、俺達は『聖教国はイーリア教会の連中によつて私物化され、腐敗している。そこに女神イーリアが現れ粛清し、人族も亜人も平等だと説く』という絵本を作り、聖教国内にばらまくことにしたのだ。

そうして、王室の力も借りながら準備を進め、俺はスイ、カーマイン、ドルーキンと共に、特製の魔導車を用意して聖教国へと出発した。

作戦は順調に進み、加えて国王陛下の協力も得て、リンバインズ王国内の過激なイーリア教信徒の貴族達を排除することに成功した。

元々の作戦では、俺はイーリア教とのトラブルを原因に爵位^{はくたい}を剥奪^{はくたつ}され、それを不服としてリン

バインズ王国から独立。

その後、秘密裡^{ひみつり}に王国の援助を受けながら、聖教国と対峙^{たいじ}する……という流れになっていた。しかし実際には、イーリア教をゴリ押しするスレイベル子爵が陛下を怒らせたため、俺はお咎め^{とが}なし。

そして王国内でのイーリア教の過度な布教は禁止となった。

要するに、国王陛下の命により正式に王国が聖教国と対立することになったのだ。

それで俺は、再び聖教国内に転移で戻ってきたところだ。

カーマイン達は既に次の街にいるということなので、俺とスイは魔導車を改良した魔導二輪車で、街道を駆け抜ける。

一日走り続けると、目的の街に到着した。

魔導二輪車を細い路地に隠し、俺達二人は大通りを進みながら周囲を観察する。

作戦通りなら、カーマイン達は路地裏で絵本を配っているか、置いて回っているはずだが……

「路地裏に絵本は置かれていないようでごさる」

「街の人に聞き込みするしかないか」

二人で相談しながら歩いていると、路上に布を敷き、数組の露天商が商売をしていた。

露天商の品を眺めていると、俺達の絵本が積まれ、商品として売られている。

「おい、この本をどこで手に入れた？」

「これは俺が作ったんだ」

「それは嘘だ。その本は俺と仲間が作ったものだ。路地で拾って、勝手に値を付けてるんだろ」俺の追及に焦った男は表情を引きつらせ「俺のものだ！」と叫んだ。

その態度に、スイは目を細め、静かにクナイを構える。

彼女の威圧に焦って後ずさる男の前に、俺は腰を屈めて絵本を手を取った。

「慌てるな。本を売ることが咎めるつもりはない」

「本当か」

「その代わり、安く売ってくれ」

「分かった」

額から汗を流し、男は何度も大きく頷く。

その様子を見て、スイはクナイを懐に戻した。

俺は男に向けて、話し続ける。

「本を置いていった連中のことを知っているか？」

「ああ……猿の仮面を着けた男達だった。広場に子供達を集めて絵本を配っていたんだ」なんだそりゃ。目立つ行動は控えるように、カーマインとドルーキンに伝えていたのに。

二人のことだから、隠密行動に飽きたのかもしれないな。

スイも同じことを思ったようで、呆れ顔で項垂れる。

それから少し男と話をし、俺達二人はその場から離れた。

男が教えてくれた広場に向かっていると、子供達が絵本を手持って路地を走り過ぎていく。

到着した広場では、多くの子供達が遊んでいたが、カーマイン達の姿はどこにもない。

一人の少年に尋ねてみると、「昨日、猿の仮面を着けたおじさん達が広場にいた」と語ってくれた。

「今日はここでは配っていないようでござるな」

「俺達が追ってくるのは分かっているはずだし、この街のどこかにはいるだろう」

目立つように絵本を配っていたということは、俺達二人への合図だと思う。

今日も同じような広場で配っている可能性が高いな。

方針を決めた俺達は、子供に他の広場への道順を聞いて、そちらへ向かうことにした。

細い通りを進み、いくつかの角を曲がって歩いていくと、小さい広場が現れた。

その中央で、見覚えのある猿の仮面を着けた一人の男が、紙芝居を行っていた。

すぐ近くではもう一人の猿仮面の男が絵本を配っている。

「女神様からの新しいご神託を伝える絵本じゃ！ 家族と一緒に読むといい」

「おじさん、ありがとう！」

絵本を受け取った子供達は、嬉しそうに笑顔で手を振り、広場から去っていった。

すると猿仮面の男二人は俺達二人に気付いたのか、大きく手を振ってくる。

「やっと帰ってきたな」

「手持ちの本が尽きかけていたんじゃ。早く邸から持ってきてくれ」

カーマインとドルーキンが、呑気にそんなことを言ってくる。

そのマイペースな様子に、俺は頭が痛くなりそうだった。

スィが二人に近寄り、首を傾げる。

「カーマインはなんで紙芝居をしてたでござるか？」

「警備兵に隠れて絵本を路地裏に置くのも効率が悪いと思ってな。子供達に語って聞かせていたんだ」

そういえば皆で絵本を製本している時、紙芝居のことを話したっけ。

休憩時間の雑談だったんだけど、カーマインは覚えていたんだな。

カーマイン達が作った道具は、木枠の箱の中に、木製の板が何枚も入っており、その板に絵本と同じ絵柄が描かれている。形としては紙芝居そのものだが、木製の板に画を彫っているから厳密には紙芝居ではないか。

まあいずれにしても、カーマインとドルーキンが作ったんだろうけど、相変わらず器用だな。

でも……

「目立つことは控えてくれと言っただろ」

「噂を広めないと、アクス達と合流できないだろ。それより、王宮からの呼び出しはどうなったんだ？ やっぱり独立する流れになったのか？」

「いや……それが話が変わったんだ」

俺が王都で起こった出来事について話すと、カーマインとドルーキンは大声で笑い合う。

「ワハハハッ。まさかフォルステル陛下が、エルスハイマ聖教国と対立の道を示されるとはな」

「これで、ワシらも派手に暴れられるわい」

二人共、悪い笑みを浮かべている。

「二人共、喜ぶのはまだ早い。俺達が失敗すれば、リンバインズ王国の面子を潰すことになるんだぞ。今までよりも、もっと慎重に動く必要がある」

「そう言いながら、アクスも笑っているじゃないか」

「アクス様が悪い顔になっているでござる」

スィにまで突っ込まれてしまった。

それから少しだけ作戦会議をした俺達は、太陽が西に沈む頃、街を出て次の街へ向かうことにした。

この街では、カーマイン達が目立ちすぎた。

留まれば、街の警備兵に発見される恐れがあるからな。

街を出た俺達は、カーマインとドルーキンはそれぞれの魔導バギーに乗り、俺とスィは魔導二輪車に乗って街道を走る。

しばらく進み、街道脇の空き地で野営をすることにした。

カーマインとドルーキンは焚火と料理の準備を進め、俺は簡易テントを設営していく。

このテントは、俺のアイデアを元に、カーマインが設計したものだ。

俺達三人が野営の準備を進めている間、スイには一旦フレンハイム領の邸に戻ってから、転移で絵本をエルスハイム聖教国の聖都へ運搬してもらった。

現在聖都では、犯罪組織『漆黒の六芒星』の元幹部アウラとその配下達と、俺の家臣であるジークが街に潜入し、街の荒くれ者達を仲間に引き込みながら、俺達と同じように絵本を配布しているのだ。

俺達は聖教国の端から聖都に向かって、アウラ達は聖都を中心に布教を展開する。

この計画には、聖都で聖教国の王宮の動向を把握し、その情報を随時、俺に流してもらう意味もあった。

アウラは元々、聖教国で活動していたこともあって、聖都に詳しい。

それに裏社会では『漆黒の六芒星』の名は知られており、彼女であれば荒くれ者達を束ねることができる。

補佐としてジークも一緒にいるので問題はない。

ジークは鳥使いであり、鳥を用いてフレンハイム領の邸に伝令を送ってくれる手筈になっていた。もし緊急の情報があれば、転移魔法が使えるスイが仲介してくれるしな。

そんなわけでスイも戻ってきて、四人揃ったので食事が終わったところで、俺は立ち上がってカーマイン達に声をかける。

「ちよつと聖都に行ってくるよ」

「分かった。ここで待っている」

「アクスがいない間、仮面を作っておいたぞい。聖都の連中が使えるように持っていくてくれい」

魔導バギーの助手席にあった麻袋を手を持ち、ドルーキンが歩いてくる。

麻袋の中を見ると、沢山の猿の仮面が入っていた。

俺は手を振り、少し離れた、カーマイン達から見えない場所まで歩いていく。

俺はスイと同じように転移魔法を使えるのだが、とあるポーズがちよつと恥ずかしいんだよな。

完全に一人になったところで、俺はまっすぐに立つと、両手を右に伸ばし、反時計回りにグルグルと腕を回していく。

こうすることで、丹田にある魔力を全身に循環させるのだ。

そして体内から指先へ魔力が流れるイメージに集中し、ピョンとカエルのように跳躍する。

スイに教えてもらった転移を成功させる運動なのだが、この動作をしないと魔法を上手く使えないなんて不便すぎる。

「聖都へ！」

次の瞬間、視界が真っ白に変わり、気が付くと薄暗い室内に立っていた。

暗い室内を見回すと、アウラ、ジーク、スイの三人の他に、アウラの仲間達も集まっている。

俺を見てジークがニヤニヤと微笑む。

「スイから聞いたぞ。リンバインズ王国の王宮では上手くやったらしいな」

「ああ、フォルステル陛下から、聖教国をとっめていいと言葉を貰ったよ」

「それはスゴイじゃないか」

喜ぶジークの隣で、アウラも深く頷いて感心している。

俺はニツコリと笑って、彼女に問いかけた。

「それでエルスハイマ聖教国の王宮の動きは？ 最近のイーリア教団のことも教えてくれ」

「リンバインズ王国の王宮の方針は、まだ聖教国側には伝わっていない。だが私達やアクスが、聖教国に絵本をばら撒いて^まいることは、既に聖教国の王宮と教団にバレている。最近^まは聖都の街中でも神官兵が増えているし、嚴重な取り締まりが始まっている」

アウラは眉間^{みげん}にしわを寄せて語った。

俺達の作った絵本の内容は、教団にとって都合が悪い。

だからこそ取り締まりが嚴重になるのは、こちらも想定済みだ。

これからは、本格的な情報戦になるだろう。

彼女に続けて、ジークが口を開く。

「教団の神官と聖教騎士団の集団が、聖都から出発していった。たぶん目的はアクス達だぜ。こっちは上手くやるから、アクスも用心してくれよ」

「分かった。注意する」

やはり動いてきたか。

聖教騎士団とは、いわばエルスハイマ聖教国の軍隊だ。

聖教騎士団を動かすなんて、聖教国の王宮も本気で焦っているようだな。

それからしばらくアウラ達と意見を交換した後、俺は転移で、カーマイン達の元へ戻った。

野営地に帰ってみると、既にカーマインとドルーキンの二人はテントの中で眠っていた。

ドルーキンのイビキが煩いのに、カーマインはよく平気だな。

テントに入るかどうか悩んでいると、まだ起きていたスイがやってきてニツコリと笑う。

「こちらのテントでは眠れないでござろう。私のテントで休むといいでござるよ」

今回の遠征では、テントを二つ用意してあった。

スイも一応は女の子だから、別のテントで寝てもらっていたのだ。

彼女の提案に、俺は首を左右に大きく振る。

「断る。スイと二人で一緒に寝たなんて邸の誰かに漏れたら、大騒ぎになる」

「誰も見ていないでござる。気にすることないでござる」

「どうせ邸に戻った時、話を捏造^{ねつぞう}して言い触らすだろ」

「既成事実になれば問題ないでござるよ」

「大いに問題あるわ！」

諦めの悪いスイを無視して、俺はさっさと男性用のテントに入って、カーマインの横にゴロリと寝転んだ。

「グオオオオオー、グオオオオオー」

相変わらずドルーキンのイビキがうるさいので熟睡はできないが、仕方がない。

俺は両耳に指を突っ込み、強引にまぶたを閉じた。

翌日の早朝、四人で朝食を取りながら、昨日のアウラ達との会話を伝える。その話を聞いて、ドルーキンは鼻息を荒くした。

「聖教騎士団が動いたか！ 楽しくなってきたわい！」

「予定よりも早いんじゃないか？ 俺達はどう動く？ 地域を変えるのか？」

カーマインは少し不安そうな表情を浮かべる。

その問いに、俺は首を左右に振った。

「どうせいつかは追い付かれる。それなら鼻先でからかってやろう」

「それは面白そうじゃのう」

「追いかけてこか。楽しくなってきたな」

ウキウキする俺、ドルーキン、カーマインの表情を見て、スイは目を大きく見開く。

「三人とも、悪い顔になってるでござる」

その言葉に、ドルーキンはさらに笑みを深くする。

「そうと決まれば、早く次の街へ行くぞい」

食事を終えた俺達四人は野営道具を撤収すると、それぞれ魔導バギー二台と魔導二輪車に乗り、さっそく走らせる。

そうして昼下がりまで走行を続けたところで、次の街が見えてきた。

外壁も高く、今までの街よりも規模が大きい。いわゆる城壁都市だ。

少し離れた場所に俺達は魔導車を停め、街を観察する。

「この街では門での検問が厳しそうだぞ。どうするんだ？」

「いつものように無視して突っ込めばいいじやろう。どうせ長居はせんのだから」

「アウラ達からの報告にあっただろ。騎士団がいる可能性もある。慎重にいくべきだが……」

今までの村や街では、強引に門を突破して、外壁の中に侵入していた。

魔導車の速度に^{おの}慣れて、兵士達も身動きできなかったからな。

外壁の外に魔導車を置いたまま、いかにして四人で街に潜入するか悩んでいると、スイがポツリと疑問を漏らす。

「そもそも、街の中で兵士達に囲まれた時はどうするでござるか？」

「スイやドルーキンは一人で突破できるだろうが、俺は無理だぞ」

「心配は要らんわい。ワシがカーマインを守ってやるぞい」

スイの言葉に、カーマインが不安そうに零すが、ドルーキンが胸をドンと叩いていた。

スイの転移魔法を使えば、仲間を一人だけ一緒に転移させることができる。

しかし、兵士に囲まれた時、スイは俺を優先して守ろうとするだろう。

それにドルーキンが強いといっても、多くの兵士に数で攻められれば、捕まるのは必至だ。

俺達四人は相談し、魔導車で強引に検問を突破することに決めた。

街の中に潜り込みさえすれば、魔導車を隠す場所はいくらでもあるからな。それに、俺達の行動は既にエルスハイマ聖教国の上層部に知られているから、今更、隠密行動にこだわることもないだろう。

「よし、今まで通りで行くぞ」

「「応！」」

俺達は一様に仮面を被り、街に入る準備を整える。

そして俺とスイは魔導二輪車に乗り、カーマインとドルーキンそれぞれの魔導バギーを始動させた。

三台の魔導車は、加速して街の門へと向かう。

「止まれ！ 止まれ！」

「街へは入らせないぞ！」

「お前達は何者だ！」

魔導車の接近に気付いた兵士達は、各々槍を構え、俺達を止めようとする。

しかし、兵士達の行動を無視して、俺はスロットルを全開にした。

車体を蛇行運転させ、兵士のギリギリをわざと通り抜ける。

すると兵士は「わあー！」と叫んで槍を手放し、地面に倒れ込んだ。

俺の乗った魔導二輪車の後ろを、二台の魔導バギーが続く。

「捕まえられるものなら、やってみろ！」

「そんなへつぱり腰で、ワシを止めることはできんわい！」

カーマインとドルーキンは、楽しそうに叫び声を上げる。

……さっきは隠密行動も考えたけど、そもそも、あの二人に目立つなというほうが無理だよな。

俺は苦笑しながら、大通りを疾走する。

そうして細い路地に魔導車を停め、車体を隠すために布で覆った。

するとスイが渋い表情で、鼻をつまんだ。

「この布、臭いでござる……」

「アクスがいけない間に色々な激臭を混ぜて、布の一枚を改良したんだ。臭い場所には誰も近づかないだろ」

「ワシは反対したんじゃないがのう」

カーマインは自慢気に胸を張りニカリと笑うが、ドルーキンには不評のようだ。

カーマインの言いたいことは、何となく分かる。

路地裏に真新しい布があれば気になるが、汚い布であれば怪しまれない。

でも臭すぎると、かえって目立つたろ。

いつものことだが、発想が斜め上すぎるんだよ。

あまりの臭さに耐えられなくなったのか、スイは布を手を持ち、「くちやい！」と叫んで、転移で姿を消す。

それから数分で、再びスイが戻ってきた。

彼女の手には、適度に汚された布が握られている。

「その布は？」

「邸にあった洗濯物でござる。リリーに訳を話して、交換してもらったでござる」

「さっきの臭い布は？」

「リリーが洗ってくれるそうでござる。アクス様には邸に戻ってきたらお話がありますと伝言でござる」

「どうして俺が……」

顔を青くして首を横に向けると、カーマインとドルーキンの二人は俺と目を合わせないように顔を背けていた。

普段は優しく、家臣の鑑のようなリリーだが、一度怒り出すとオルバートでも逃げ出すほど怖いのだ。その恐怖を、邸の者達であれば誰でも知っている。

「怒られる時は、二人も一緒だからな」

「分かった。俺からも謝るよ」

「アクス一人が説教されるのも不憫^{ふびん}じゃしもう」

いや、二人が臭い布を作ったのが原因だろ。どうして俺の責任みたいになってるんだ。

リリーには二人がやったと告げ口してやる。きつと彼女なら分かってくれるよね……

そんな騒動がありつつも、俺達は魔導車を無事に隠し、細い路地を歩いていく。

小さい空き地に到着した俺達四人は、さっそく絵本を配ることにした。

するとドルーキンが背負ってきた木製の道具を、カーマインが組み立て始める。

「何をしてるんだ？」

「紙芝居の準備に決まっているだろ」

「このほうが子供達が集まってくるんじゃない？」

なるほど、昨日も紙芝居をしていたのはそれが理由か。

紙芝居の準備を終えたカーマインが、大声で周囲に呼びかける。

「聖都で流行っている芝居だよ。新しい女神様のご神託の話だー！」

「女神様からの新しい話じゃ。女神様を好きな子は集まるぞい」

二人の声を聞いて、路上にいた子供達が近寄ってくる。

あつという間に十人ほどの子供達が、二人の前に集まった。

その子供達を前に、カーマインとドルーキンが紙芝居を始めた。

「昔々、エルスハイマ聖教国の聖都に女神イーリアがご降臨された。そして教皇様のご先祖にご神託を与えた」

「わらわは、女神イーリアじゃ。教皇に神託を与えるぞい」

カーマインの解説は問題ない。

だが、ドルーキンが女神の声役なんて、誰がこの配役を考えたんだ。

女神様が筋肉ムキムキ、髭^{ひげ}を伸ばし放題のドワーフなわけない。

せめて、その役は女性の担当だろ。女神様に謝れ。

呆然と口を開けたまま立ち尽くしている俺の隣で、スイが子供達に絵本を手渡ししていく。

「おい、あれを見ても、何も思わないのか？」

「子供達は楽しそうでござる」

「そう言われると……」

ドルーキンが女性を真似た言葉を発する度に、子供達はゲラゲラと笑い転がっている。かなりハマっているようだ。

子供達が楽しいならそれでもいいか。芸人のコントと思えば、確かに面白い。気持ちを切り替え、俺も子供達に絵本を配る。

二十分ほどで紙芝居は終わり、子供達がワイワイと騒ぎ出した。

「もう一度、お話をしてー！」

「新しい話はないのー？」

「今はこの話しかないんだ。もう一度、話をしてやるよ」

得意げにカーマインは親指を突き上げ、また紙芝居を始めた。カーマインもドルーキンも子供好きだからな。

でも、完全に絵本を配布する仕事を忘れていたのだろ。

とはいえ、せっかく子供達が楽しく集まっているのに邪魔するのも悪い。

ということで、俺とスイの二人だけで、広場を離れて絵本を近くの路地裏に置いていく。路地を通る人達に、スイは声をかける。

「女神様からの絵本でござる」

「うわー、猿だ！」

「失礼でござるな！ 私は可愛い女子でござる！」

逃げていく通行人に向けて、スイが文句を叫ぶ。

そんな彼女の肩に、俺はポンと手を置いた。

「仮面。仮面のことだ」

「アクス様、この仮面は嫌いでござる！ 可愛いお面が欲しいでござるよ」

「そうだな……後でカーマインに相談してみるか」

細い路地を通り抜けて大通りに顔を出すと、武器を持った兵士達が数人で巡回しているのが見えた。

その兵士に、一人の男が近寄り、俺達のほうへ指を向けて何かを伝えている。

「ヤバい、チクられた！」

「カーマイン達に知らせるでござるよ」

「スイは転移して二人に知らせろ！ 魔導車の隠し場所で落ち合おう！」

「分かったでござる！ アクス様も気を付けるでござるよ！」

心配そうな表情を浮かべながらも深く頷き、スイは転移していった。

それと同時に、俺も路地を走り出す。

後ろを振り返ると、男と共に兵士達が俺がいる路地を覗き込んでいた。

よく考えなくても、エルスハイマ聖教国に住む者達は、全てイーリア教の信者だ。聖都で手伝ってくれている荒くれ者のように、政治に不満を抱いている者も多いが、それでも女神イーリアと教皇の人氣は絶大である。

妙な仮面を被った連中が、新しい女神様のご神託と称して絵本を配っていれば、敬虔な信徒であれば兵士に通報するのは当然のことだ。

これまでの村や町でも、告げ口され、兵士達に追われたことはあった。

「へへヘッ……ここまでおいで！」

後ろを振り向き、俺は片手を大きく振る。

そして、全力疾走に切り替えた。

「待て！ 猿仮面！」

「止まれ！ 変人！」

後ろから失礼な叫びが聞こえてくるが、今は無視だ。

兵士達の人数は多く、囲まれれば確実に捕まる。

いざとなれば、転移魔法を使って逃げられるが、焦って魔法を発動させるとどこに転移するか分からない。

それから三十分ほど全力で走り続けたのだが、さすがに足が徐々に重くなってきた。

後ろを見ると、まだ兵士達が追いかけてきている。

重い鎧と槍を持っているのに、疲れないのか？

通りの角を次々と曲がり、迷路のような路地を走り続ける。

「しつこすぎる……もう限界だ」

とうとう体力が尽き、走ることができなくなった。

ハアハアと荒い呼吸をして重い体を引きずるように歩いていると、すぐそばの民家の扉が開き、男の子が手招きしてくる。

「お兄ちゃん、こっち、こっち」

思わず扉の中に入ると、男の子はパタンと扉を閉めた。

そして俺の元まで来て、両手で絵本を抱えてニコニコと微笑む。

「もう大丈夫だよ。お兄ちゃん」

どうやら絵本を配っていた時に、受け取ってくれた男の子のようだ。

「助けてくれて、ありがとうな」

俺はニコリと笑い、男の子の髪を撫でた。

すると近くから声が聞こえてきた。

「息子に絵本をくれた方ですね。兵士達が去るまで、ゆっくりしてください」

「すみません……でも、どうして俺を匿ってくれるんですか？」

「だって、息子がお世話になったんですから、お礼をするのは当然です」

お母さんらしき女性は、そう言ってニコリと微笑んだ。

男の子の年齢は六歳ぐらいか……お母さんも、まだ二十歳ほどに見える。

俺と母親が話していると、男の子は台所まで走っていき、コップに水を入れて持ってきてくれた。
「お兄ちゃん、水を飲んで」

「ありがとう」

自己紹介してくれたのだが、男の子の名前はルト、お母さんの名はエマさんだ。

飯面を外して水を飲み、俺はフーっと大きく息を吐いた。

「喉がカラカラだったので、助かりました」

「お腹が空いているなら、軽い食事でも用意しましょうか？」

「いえ……時間もないので、すみません」

「そういえば、追われていたんですね」

今気付いたように、エマさんはクスクスと笑い出した。

どうも彼女はおっとりした性格のようだ。

するとルトが絵本を片手に問いかけてきた。

「この絵本のお話、本当のことなの？」

「うーん、半分はホントで、半分は創作だな」

「お母さん、創作って何？」

まだ幼い子供には、創作といっても意味が分からなかったようだ。

どうやって説明すればいいか悩んでいると、エマさんが優しくルトを抱き寄せた。

「パンケーキにバターを塗ると美味^{おい}しいでしょ。それにハチミツをかけるともっと美味^{おい}しいわ」

「創作って話を美味しくすることなの？」

「そうそう……」

うーん、それは創作じゃなくて脚色……だけど。

まあ、作り物のお話だよとか言って、嘘だと思われても嫌だしな。

余計なことを言わないようにしよう。

エマさんの例えを聞いて、ルトはニコリと微笑む。

仲のいい親子の様子に、俺は思わずホッとした気持ちになった。

家の外では、兵士達が「どこに消えた！」と騒いで、俺のことを探しているようだ。

しかし、家の中に隠れたとは考えていないようで、しばらく待っていると、足音は消えていった。

「お兄ちゃん、兵士さん達、行っちゃったね」

「助けてくれてありがとう。また会おうな」

俺はルトと握手をして、エマさんに「行きます」と挨拶^{あいさつ}をする。

すると彼女はルトの隣に立ち、小さく手を振った。

「絵本の内容、すごくよかったです。心優しい女神様は人種にかかわらず、全ての人々を愛しておられる。私はイーリア教の信者ですが、こちらの物語も大好きになりました」

「そう言ってもらえて嬉しいです。ではまた」

二人と別れ、通りに出た俺は振り返って、閉められた扉を見る。

偶然だけど、いい出会いだった。

また、うちの作家のアンナに頼んで新しい絵本でも作ってみようかな。
新作が完成したら、ルトに絵本を渡しに来よう。

路地を歩き始めて五分ほど経ったところで、俺は自分の居場所が分からなくなっていることに気付いた。

それもそうか、ずっと必死に走ってたんだし。
でも、問題はない。

俺は両腕を回し、ピョンと跳ねて転移した。

次の瞬間、視覚が真っ白になり、誰かとドンとぶつかった。

衝撃に驚き周りを見ると、カーマインが路上に倒れていた。

そう、集合場所に直接転移したのだ。

「いきなり現れるなんて酷いじゃないか」

「兵士達を撒いてる間に、道に迷ったんだ」

「転移で戻ってこられてよかったでござる」

「アクスも合流できた。すぐに出発するぞい」

カーマインに手を貸し、ドルーキンは豪快に笑う。

俺が魔導二輪車に跨ると、スィは後ろに座り、両手を俺の腰に回す。

「アクス様、かすかにいい香りがするでござる。どこかで浮気していたでござるか？」

「兵士に追いかけていたんだぞ！ そんな暇もないわ！」

「怒るところが怪しいでござる。邸に戻ったら、皆に報告するでござるよ」

「だーからー、スィの勘違いだ！」

追及してくるスィを無視して、俺はスロットルを全開にして、魔導二輪車を急発進させた。

エマさんと会話はしたが、触れてもないぞ。匂いがうつることなんてないだろ。

それにしても、女の勘というか、スィの嗅覚が恐ろしすぎる。

細い路地を出て、大通りを疾走する。

後ろから、カーマインとドルーキンの乗った魔導バギーも追い付いてきた。

通りを走行し門へ向かうと、兵士達が武器を持って、待ち構えていた。

街に入る時よりも兵士の数が倍ほどに増えている。

「スィ、突っ込むぞ！ 強く抱きついていろよ！」

「一生、離れないでござる！」

スィの言葉を聞いて悪寒が背中を走り、俺は魔導二輪車を蛇行させながら、門へと突っ込んでいく。

「ヒィー！」

「うわー！」

あまりの暴走に、車体に轢かれかけた兵士達の表情が恐怖に染まり、武器を放り投げて逃げ出した。

やっと通常の操縦姿勢を取り戻した俺は、そのまま一気に街の外へと駆け抜ける。

後ろを振り返ると、二台の魔導バギーも無事に街から脱出していた。

その後、一時間ほど街道を走り、追っ手が来ていないことを確認して、開けた場所に魔導二輪車を停車させる。

カーメイン達も魔導バギーを止め、車から下りてきた。

「派手な逃げっぷりだったな」

「久しぶりに楽しかったぞい！」

カーメインとドルーキンは楽しそうに笑う。

どうして俺の周りに集まってくる連中は、お祭り騒ぎが好きな人ばかりなんだろうか。

魔導車があれば兵士達に捕まることはないが、やはり街中では、もっと注意するようにしよう。

それから三時間ほど街道を走行し、道の脇に林があったので、今日は林の中で野営をすることにした。

林の中に車体を隠し、木の枝を拾って、焚火の準備を進める。

街での追いかけて疲れていたのか、夕食を食べた後、俺はすぐに就寝し、ドルーキンのイビキも気にならなかったのだった。

第2章 王国内の不穏

それから一週間かけて、俺達四人は七つの村や街で絵本を配布して回った。

街に入る時は、門を守る兵士達の邪魔はあったが、毎回、魔導車で突っ切った。

そうして順調に旅を続けていた俺だったが、一度、フレンハイム領の邸に戻ることにした。

この一週間、スイに絵本を運搬してもらったが、俺は一度も顔を見せていないからな。

街道の脇にある空き地で、ドルーキンとカーメインは野営の準備をしながら休憩をしている。

二人に後のことは任せ、俺とスイは転移で邸へと赴いた。

廊下に転移した俺は、スイと別れて、執務室へ向かう。

扉を開けて室内に入ると、エルナとオルバートの二人が机に座り、事務作業をしていた。

「戻ってこられたのですね」

「領内の状況はどうなっている？」

以前、イーリア教の連中が、俺の運営するこいはる商會が所有する本を読める茶屋『こもれび』にちよっかいを出してきてたからな。

『こもれび』が中心となって、リリー達が絵本の配布を行っています。またイーリア教の信者達

が抵抗を続けていますが、街の警備についてはボルドが厳しく取り締まっていますので、問題ありません」

オルバートの報告を聞き、ひとまず俺は安堵の息を吐いた。

こちらで配っている絵本は、聖教国で配っているものから、聖教国の腐敗についての内容を省いたものだ。

今回の騒動で、一番迷惑を被っているのは『こもれば』だからな。商会で契約している作家が書いた物語を本にして置いている『こもれば』は、既に全国展開しているほどの人気がある。

まさか、BLや十八禁がこの世界でもウケるとは思っていなかったが、売ればいいのだ。

この国の第一王女であるユリアーナ殿下も、ご自身で執筆した恋愛小説を出版してくれているし、『こもれば』は俺としても大事にしたい。

するとエルナも肩を竦めて言葉を続ける。

「領都フレンスの信徒達の抗議活動は、以前よりも少なくなってきたわ。絵本の内容に影響を受けて、街の人々が種族間での諍いをしなくなってきたのが大きいわね」

「思っていたより効果があつたようだな」

聖教国内での効果については、正直よく分かっていない。街では兵士に追われてばかりなんだよな。

だからそのぶん、フレンハイム領内は上手くいっていると聞いて、とても嬉しい。

エルナの報告に笑みを浮かべていると、彼女にジーツと睨まれた。

「もう私が領主代理をしなくてもいいでしょ。オルバートさんや他の重鎮だけでも、十分に対処できるわ」

「それもそうだな。ウラレント領まで俺が転移で送っていくよ。今日までありがとうな」

俺がそう言うのと、エルナは頬を膨らませる。

「そういうことを言ってるんじゃないわ。アクスだけ王都に行ったり、聖教国へ行ったり、ズルいと言ってるの。私だって遊びたいわ！」

「俺は遊んでいるわけじゃなくて……」

そこまで言って、俺は口をつぐんだ。

聖教国に潜入して魔導二輪車で旅をして、仲間と気ままに野営をして。

絵本を配るといふ作戦を行ってはいるが、領内の管理のような仕事ではない。

仕事にしては、自由に行動しているよな。

どう答えたものか悩んでいると、オルバートが静かに提案をする。

「ウラレント領へ戻られる前に、アクス様の仕事を手伝ってもらうのはいかがでしょう。危険が伴うのであれば、誰かに護衛として同行してもらいましょう」

「分かった、考えてみるよ」

「アクス、約束だからね」

一旦、オルバートの案を保留にして、俺は執務室を後にし、廊下で転移魔法を発動させた。

やってきたのは、リンバインズ王国の王城の廊下。

そのままベヒトハイム宰相の部屋の前に向かった俺は、扉をノックし中に入る。

「アクスです。お久しぶりです」

「一週間ぶりか。相変わらず急に来るな、お前は……まずは報告を聞こう」

窓際の重厚な机に座り、ベヒトハイム宰相は深く頷く。

俺は簡潔に、エルスハイム聖教国内、そしてフレンハイム領内での絵本の配布状況を伝えた。すると、ベヒトハイム宰相が厳しい表情をする。

「そちらは上手くやっているようだな」

「と、言いますと？」

「先日の方ルステル陛下からの公表があつて以来、貴族達の動きが騒がしいのだ」

「例のイーリア教に心酔している貴族達のことですね」

「うむ。面と向かつて王宮への抗議はしてきていないが、裏で仲間を募っているようだ」

現状を憂いているのか、ベヒトハイム宰相の顔色は優れない。

リンバインズ王国内でも、多くの人族、そして貴族がイーリア教を信仰している。

先日の騒動でスレイベル子爵を追放し、布教を禁止したことで、イーリア教を支持する貴族達の勢いを削いだだが、まだ大人しく引き下がってはいないようだ。

「だが、悪いことばかりではない。『こもれば』の店舗がある領地の貴族達は、アクスとの関係を重視している。それから、魔導車を購入した貴族達も、慎重に状況を見極めて……まさかアク

スの商売が功を奏するとはな」

「地方でも絵本の配布が始まっていますよね」

「王都より、順次絵本を地方に運搬している。ただ、地方に届いた絵本が市民に上手く配布されているか、詳細は不明だ」

「広がり方に差異があるということですか」

どの貴族も一口に、王宮の敵か味方かとは言えないのだ。

表面では、王宮に協力する素振りを見せる。

しかし、裏では王宮の命令に反した動きもする。

それが貴族だからな。

「方ルステル陛下はどのように仰っているのですか？」

「レイモンドとアクスに任せていると言われている」

「では王国内の対応は？」

「レイモンドが対策を検討中だ。今日はまだ城にいるなら、アクスも検討に加わるように」

「そうします」

ベヒトハイム宰相から、レイモンドが来賓室にしていると聞いて、俺は礼をして執務室を出た。

階段を下りて、長い廊下を歩いていく。

目的の部屋に到着した俺は、ゆっくりと扉を開けた。

室内に入ると、ソファに座り、レイモンドが悩ましい表情を浮かべていた。

「ベヒトハイム宰相から聞いてきた。頑張っているみたいだな」

「他人事のように言わないでください。アクスがいないので、僕が一人で担うことになったんですから」

「悪い悪い。元はといえば俺に原因があるからな。当然協力するよ。現状を詳しく教えてくれ」

「助かります。丁度、アクスのアイデアを聞きたいと思っていたところでした」

対面の席に座ると、レイモンドは穏やかに微笑み、話し始めた。

「南部諸侯は僕やアクスを気にして、目立った動きはありません。エルスハイム聖教国と国境を接する地域の貴族達の動きが怪しいですね」

「北部の貴族達だな」

「ええ。その者達だけであればさほどの問題はありません。ただ……イーリア教団を守ろうとする貴族が他にもいるようなのです」

そこまで話し、レイモンドは微妙な表情をする。

「ウルデネス侯爵が裏で動いているようなのです」

「ああ……そうなるのか。参ったな」

ウルデネス侯爵の領地は王国北部、聖教国とも国境を接している。

ウルデネス家は、王家の遠戚(えんせき)にあたる。同時に、聖教国とも関係が深い。

今までは王家に配慮して控えていたのだろうが、イーリア教団が本格的に王国から排除される動

きを知って、重い腰を上げてきたのかもしれない。

リンバインズ王国も一枚岩ではない。

王国南部は、エクムント辺境伯——レイモンドを中心に、今は南部諸侯もまとまっているが、それまではハラデール伯爵の反乱など、様々な騒乱があった。

王国南部が王宮を支えることで、王国内も少しは安定してきたと思っていたが、そう上手くはいかないか。

そういうえば、魔導車販売の時に招待状を送ったはずだから、あの会場には、ウルデネス侯爵も来ていたような……

あの時は『漆黒の六芒星』の襲撃もあったし、来賓として来られていたユリアーナ殿下の護衛で頭が一杯だったからな。

だから侯爵が抽選に当たって、魔導車を購入できていたかは分からない。まあ、購入できていたら、俺と敵対するような行動はとらないと思うが……

と、ふと疑問が湧(わ)き、レイモンドに問いかける。

「侯爵は、どのような方なんだ？」

「四代前の王から繋(つな)がる家柄と聞いてはいますが、僕も侯爵本人と話したことはありませんね。以前から、一度はご挨拶したほうがいいとは思っていたんですが」

「それなら、話が早い。ベヒトハイム宰相なら、どんな方なのか知っているはずだ。ちょっと聞いてくるよ」

「僕も一緒に行きましょう」

レイモンドと俺は席を立ち、ベヒトハイム宰相の執務室へ再び向かうことになった。

二人揃って室内に入ると、ベヒトハイム宰相は机から顔を上げる。

「レイモンド、何か妙案を思いついたのか？」

「いえ、アクスがウルデネス侯爵のことを知りたいと言いました」

「どのような方か、教えてください」

俺達二人が頭を下げると、ベヒトハイム宰相は立ち上がり、机を迂回して歩いてきた。

そして何も言わずにソファに座る。

向かいのソファに俺達が二人並んで座り、ベヒトハイム宰相は話し始めた。

「当代の侯爵は、^{よむ}齡六十を超え、王家の忠臣として知られる御仁だ。貴族としての裏表はあるが、王宮を常に支えてくれていた。最近は頻繁に体調を崩し、領内に籠もっている」

「領地の管理は誰がされているのですか？」

「王宮への報告では子息とあったな」

貴族の世襲は、それぞれの事情により、平均的な年齢はない。俺とかレイモンドもかなり若かつたし。

ただ、侯爵自身が高齢なので、後継ぎは俺よりも年上だろうか。

「侯爵のご子息は何人おられるのですか？」

「十年ほど前に、第一子を病で亡くされている。今は^{みづれい}妙齡の娘と、八歳の息子がいるはずだ」
なんだって？ 思っていた以上に若いぞ。

他の者が領地管理をしているのか？

「では領主の代行は誰が？」

「季節ごとに送られてくる報告書の名義は、息子になっている」

その答えを聞いて、俺は思わず声を出す。

「八歳の子供に領主は無理でしょう」

「姉である娘もいるし、文官も多数いる。領内を統治できていれば問題はない」

それで王宮はいいのかと言いたい……貴族社会ではよくあることだよな。

俺も父上が戦で亡くなったことで、問答無用で爵位を受け継いだわけだし。

すると、俺の隣に座っているレイモンドが神妙な面持ちで首を傾げる。

「イーリア教の件で、ウルデネス侯爵が陰で動いているという報告があります。しかし、本人が病に臥せているのであれば、おかしい話になりますね」

「侯爵といえば、以前、娘とマンハイム伯爵の縁談が一時持ち上がっていたな。だが結局話はまとまらなかったと聞いている。詳しいことは知らないが」

マンハイム伯爵領といえば、スレイベル子爵領の隣にある。

王宮の調べでは、マンハイム伯爵もイーリア教信者の一人だったはず。

何の根拠もないが、妙な繋がりを感じるな。

俺は姿勢を正して、ベヒトハイム宰相に願ひ出た。

「ウルデネス侯爵の見舞いに行ってもよろしいでしょうか？」

「僕も一緒に行きます。今後、辺境伯として対面するかもしれませんので」

「それなら、王宮の代理として向かうがいい。書簡をしたためてやろう」

地方貴族ではない俺だけなら不安だが、王国南部を束ねる辺境伯としてレイモンドが見舞いに来たとなれば、侯爵も簡単に拒否できない。

侯爵領の周辺に領地を持つ貴族達の多くが、イーリア教を妄信する者達ばかりだということは、ベヒトハイム宰相も分かっている。

その上で、王宮からの書簡を持っていけということは、俺とレイモンドの二人で、ウルデネス侯爵に関する情報の真偽を確かめろということだろう。

それからもう少し、三人で話し合い、二日後に王都から王国北部へ出発することになった。執務室から出た後、レイモンドは元の部屋へと戻っていった。

廊下で彼の背中を見送り、俺は魔法を発動させて転移するのだった。

戻った先は、領都フレンスの俺の邸だ。

すぐに聖教国に戻ってカーマイン達と合流するつもりだったが、予定が変わってきた。

俺は、廊下を歩きながら、大声を上げる。

「おーい、スイ、いるんだろ」

「バレたでござるか」

通路の壁の影からスイがピョンと飛び出してきた。

そんな彼女に「一緒に来てくれ」と告げ、二人で廊下を歩き、執務室の扉を開けて中に入る。

突然現れた俺に、オルバートとエルナが目丸くしているが、俺は気にせず口を開いた。

「急で申し訳ないが、エルナ、スイと一緒に聖教国に行ってみないか？」

「え？ いいの？」

「アクス様、それは性急すぎます。エルナ様は帝国のウラレント侯爵のご息女です。他国に行つて危険な目に遭^あえば取り返しがつきません。私は断固反対します」

「確かに、それはマズイな」

俺の脳裏に一瞬、ベヒトハイム宰相とウラレント侯爵の顔が浮かぶ。

エルナに何かあれば、絶対に詰められる。

そのことに気付いて表情を引きつらせていると、エルナが腰に手を当て頬を膨らませた。

「私だって、自由に遊びたいわ！ 帝国の侯爵領に戻ってもまた領地管理をする羽目になるんだから、事務作業なんてもうウンザリ！」

元々はエルナも軍を率いて、フレンハイム領に攻めてきたほどのお転婆娘^{てんぱな}だ。

最近はずっと大人しくしていたけど、そろそろストレスが爆発するかもな。

「うーん、ジェシカは邸にいるか？」

「領内の巡回を終えて邸に戻ってきていますが、勝手に予定を変更すると、アクス様が怒られま

すよ」

「構わないから、呼んできてくれ」

ジェシカは父上の頃からの忠臣だから、俺もすっかり怒られ慣れているのだ。オルバートは諦めたように息を吐き、退室していった。

するとエルナは人差し指で唇を押し、可愛く首を傾げる。

「急に私を他国に誘うなんて、何かあったの？」

「ああ……実は、リンバインズ王国内で、妙な動きがあるみたいなんだ」

「聖教国が絡んでいるの？」

「それは調査してみないと分からない。でもイーリア教が関わっているのは確かだ」

「じゃあ、アクスは王国内のことで忙しいから、私はアクスの代わりに聖教国に行って、今やっている仕事を代わってほしいってこと？」

「そういうことになるな」

俺の答えを聞いて、エルナは両眉を吊り上げる。

「アクスと一緒に聖教国に行けると思っていたのに！」

「また代わりを押し付けてゴメンな」

「そういうことを怒ってるんじゃないわ」

「エルナの身に危険が及ばないように、ジェシカを護衛として同行させるから」

「もう、まったく分かってない！」



エルナがプリプリと怒りだした。

するとスイが静かに彼女の隣に立ち、優しく肩の上に手を置く。

「アクス様に女心は分らないでござるよ」

「本当にそうね、呆れちゃうわ」

二人は意気投合して、俺の悪口を言い出した。

改めて考えてみると、聖教国との一件があつて以来、エルナにもスイにも無理をさせている。

仲間だからと甘えすぎていたかもしれないな。

少し反省した俺は、姿勢を正して深々と頭を下げた。

「二人には苦勞をかける。謝るから協力してくれ」

「……」

スツと頭を上げると、スイもエルナも気の抜けた表情になり、互いに顔を見つめ、長い息を吐く。何も言われていないが、的外れなことを言ってしまったのかも。

恥ずかしくなり、焦っていると、扉を開けてオルバートとジェシカが入ってきた。

「話は聞いた。私にエルナ様の護衛として聖教国に行けというのか」

「レイモンドに協力して、王国内の調査に行くことになってね」

「はあ……少しはフレンハイム領に留まって、領内の安定にも気を配れ。フランスはボルドが警備兵を用いて治安を維持しているが、フレンハイム軍は東西の領地を巡回しているんだぞ。人手がいくらあつても足りないんだぞ」

いつもならハミルトンやフランソワに任せてしまうジェシカが、真面目なことを言い出した。

これは無理に頼める感じでもなさそうだな。

「まだ領内は荒れているのか？」

「貴様が配布した絵本が原因だ。表面上は暴動も抗議も収まっているが、イーリア教の妄信者達は今でも身を潜めながら布教を行っている。私、ハミルトン、フランソワの三人で軍を三つに分けて領内を見回っているが、それでも全てに目を行き届かせるのは無理だ」

「そうなのか……絵本の普及で、市民の諍いが沈静化していると聞いていたから、領内は落ち着いたものだと思ってたんだが……皆には負担をかけているんだな……すまなかった」

「ふんっ……出来の悪い領主を支えるのが私達の務めだ。気にするな」

ジェシカはニヤリと笑い、俺の額を指でデコピンした。

仲間達がいなければ、俺一人では領地を治めることもままならない。まだまだ父上には及ばないということだろうな。

ジェシカは背中を向け扉まで歩き立ち止まった。

「エルナの護衛なら、クレトにさせればいい。あいつも男だ。頼りにはならないが信用はできる。それにコハルも一緒に連れていけばいい。クレトよりも役に立つだろ」

「そうか、その手があったか」

ジェシカ以外にも、頼れる仲間は沢山いる。

コハルは邸で飼っている俺のペットのことだ。

外見は可愛い子狐^{こぎつね}だけど、実は伝説の神獣^{しんじゅう}、九尾の金狐^{きんぎつね}の子供である。本気になったコハルを止めるのは、屈強な兵士でも難しい。用心棒としてピッタリだ。

するとエルナが目輝かせた。

「じゃあ、私も聖教国に行つていいの？」

「オルバート、クレトとコハルをエルナに同行させる。それならいいだろ」

「コハルが一緒なら大丈夫でしょう」

オルバートの心の中では、クレトよりコハルのほうが上なんだな。

でもまあ、可愛いコハルが正義。これは譲れないよね。

「そういえば、コハルはどこにいるの？」

「最近アンナの部屋に入り浸っているわよ」

「分かった。連れてくるよ」

「では、私はクレトを連れてきましょう」

部屋を出て、オルバートはクレトがいるはずの厩舎^{きうしゃ}に向かい、俺はアンナとクレア——うちの専属作家に与えた部屋へと赴く。

扉を開けると、二人は執筆中のように、机に向かっていた。

そして奥のベッドで、コハルがスヤスヤと眠っていた。

俺は顔を上げた二人に向けて、片手を挙げる。

「仕事中か？」

「あら、アクスじゃない。聖教国から戻ったの？」

アンナがペンを置き、そう言つて首を傾げた。

「ああ。領内の様子が気になって戻ってきたんだ」

「それなら、ユリアーナが書いた物語を読んでいつて。今、校正していたところだから」

「それはいいけど……内容に何か問題でもあるのか？」

アンナの発言にどう思うかと思っていると、クレアが顔を真っ赤にしながらおずおずと口を開いた。気付けばアンナも顔が真っ赤だ。

「えっと……私の口からは言えませんが……」

十八禁やBLにも耐性のある二人が恥ずかしがるなんて。

アンナに手渡された原稿を、一枚一枚めくっていく。

内容は、十歳ぐらいの貴族の子息と子女の淡い初恋の物語だった。

少し離れて歩くだけで、胸をときめかせる二人……実に初々^{ういせい}しい。

「いい物語じゃないか。どこがおかしいんだ？」

「見つめ合つて、会話のように互いに想いを伝え合っているでしょ」

「恋人同士なんだからいいんじゃないのか？」

「指と指を絡ませて、二人は恥ずかしくて視線も合わせていないんです」

「初恋だからそんなもんだろ？」